

# ヤリン文書

## —— 14 世紀初頭のウイグル文供出命令文書 6 件 ——

松 井 太

**Abstracts:** This paper investigates six Uigur administrative orders for delivery brought from the Turfan region. On the six orders we find that several official seals and personal names appear more than once. It is clear that the orders for delivery were issued from a single group of officials to a certain group of Uigur inhabitants. We may call these orders for delivery the “Yalin-texts” after one of the personal names that appears frequently. Moreover, on the basis of the dating statement on two of the orders, the author has determined that the six orders are most probably from the early fourteenth century. In comparison with the seventeen Uigur administrative orders for delivery issued under Čayatai-ulus in the mid-fourteenth century, the author concludes that the system of administration within which the orders for delivery functioned was almost unchanged through the fourteenth century. Finally the Romanized texts which are the basis for above argument are presented with fully annotated Japanese translation and photo-reproductions.

### はじめに

トウルフアン盆地を中心とする東トルキスタンから発掘将来されたいわゆる古ウイグル語文書のなかには、供出命令文書すなわち物件（金銭・人的労働力をも含む）の供出を命令する公文書が多数存在する。これらウイグル文供出命令文書が、13～14世紀のモンゴル支配下でのウイグルスタン（pers. Uyğüristān.「ウイグルの地」を意味し、トウルフアン盆地を中心とする東部天山地方をさす）の歴史研究において重要な史料となることは、すでに拙稿〔松井 1998a; 松井 1998b; 松井 2002〕で明らかにしてきた通りである。

ウイグル文供出命令文書の歴史学的利用のためには、年代比定および文献学的テキスト校訂が重要な基礎作業となる。筆者はかねてから世界各国に所蔵されるウイグル文供出命令文書のテキスト集成・校訂作業を進めている<sup>(1)</sup>。その過程で、筆者は、本稿で扱う6件のウイグル文供出命令文書が、いずれも14世紀初頭に年代比定され、また作成者・発行責任者や作成時期といった歴史的背景を共通にしており、「ヤリン文書」と総称し得るものであることを発見した。14世紀以降のウイグルスタンに関する情報がペルシア語・漢文の編纂史料群には乏しく、また個々のウイグル文書に残された情報がきわめて断片的・孤立的であることがウイグル文書の歴史学的利用を困難にしてきた点を考慮する

<sup>(1)</sup> Cf. Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften (ed.), *Turfanforschung*, Berlin, 2002, p. 16.

と、当該のウイグル文供出命令文書6件の史料価値は大きいといえる。

そこで本稿では、これらの文書の歴史的背景について基礎的な考察を行なうとともに、校訂テキスト・訳註・写真複製を提示して史料利用の条件を整えることとする<sup>(2)</sup>。

## 1. ヤリン文書

まず、本稿で扱う6件の供出命令文書 (**Texts A-F**) が共通の歴史的背景を有することを論証する。**Texts A-F**のうち、**Texts A, B**はいずれも *it yil yana bişinç ay ygrmikä*「犬年再 (= 閏) 五月二十日に」という同一の年月日記載をもつ。また供出命令によって便宜を供与される公権力者<sup>(3)</sup>である万戸長 (*tümän noyın < mo. tümen noyan*)・ビュリユングュテイ (*Bürüngütäy*)・キタイ=ダルガ (*Qitay taruğa*)や、供出負担者となるヤリン (*Yalın*)・オグリユンチ (*Ögrünç*)・ブルハン=オグリ (*Burxan-Oyli*)ら、文書に登場する人物も完全に一致する。以上の点から、**Texts A, B**が共通の歴史的背景のもとで発行されたことは明白である。

次に、**Texts C-E**の3件には、計3種類の印章が共通して捺されている。以下に図示しつつ説明する。

**印章A**：印文は篆字の可能性もあるが不明。縦 1.7 ~ 1.8 x 横 1.6 cm のほぼ方形。

**印章B**：印面は図像学的。縦 1.2 ~ 1.3 x 横 1.9 cm。 **Texts C-E**のうちでは **Text C** のみにみえる。

**印章C**：印文は漢字で「劉記」（「劉」は俗字「刘」）と解釈できる。縦 2.3 x 横 1.4 ~ 1.5 cm。常に 90 度左回転されて捺される。



この3種類の印章のうち、印章Aは **Texts C-E**のすべてに（ただし **Text C**では 90 度左回転されて）捺されている。また印章Cも **Texts D, E**の両方にみえ、印章Aに続けて捺されている。従って **Texts C-E**の3件は同一の公権力者によって作成・発行されたものと考えられる。また **Texts C, D**には、いずれもケルシン (*Kärsin*)・ヤリン (*Yalın*)という人物が供出負担者として一緒に登場し、**Text E**でも供出負担者としてケルシンを推補し得る〔語註 **E2b** 参照〕。以上の点から **Texts C-E**の3件も、捺印者（すなわち文書発行に関わる公権力者）や供出負担者など、歴史的背景を同じくして作成・発行されたものといえる。

さらに **Text F**にも供出負担者としてケルシンが現れ、またヤリンを推補できる。**Text F**には印鑑

<sup>(2)</sup> 本稿におけるウイグル語転写は翻字と標準的発音表記とを折衷した SUK 2 の方式におおむね準拠し、その他の諸言語については慣用の方式に従う。原文書の破損脱落や和訳に関しては拙稿〔松井 1998b, p. 13〕の凡例に従う。なお、貴重な史料の公刊を許可されたベルリン=ブランデンブルク科学アカデミー (BBAW) および国立ベルリン=インド美術館 (MIK) に深甚の謝意を表す。

<sup>(3)</sup> モンゴル時代ウイグルistanの公権力者層については梅村 [1977] の所論を参照。

が残されていないので断定はできないものの、彼らも **Text C, D** にみえるケルシン・ヤリンと同一人物であり、従って **Text F** も **Texts C-E** と歴史的背景を共通にする可能性が高いと筆者は考える。

さて **Texts A-F** について、上記3種類の印章の有無、またケルシン・ヤリンという2名の供出負担者の有無を整理すると、右表のようになる。

ここで注目すべきは、**Text C** に捺されている印章Bが**Text A**にも捺されていることである（ただし、印鑑の向きは**Text C**とは180度回転している）。つまり、この印章Bによって**Texts A, B**と**Texts C-F**とを結びつけることが可能となる。従って**Texts A, B**に供出負担者と

Text	印章 A	印章 B	印章 C	Kärsin	Yalin
A		○			○
B					○
C	○	○		○	○
D	○		○	○	○
E	○		○	△	
F				○	○

として現れるヤリンという人物も、**Texts C, D, F**にケルシンとともに現れる者と同一人物とみなすことができる。また、文書の料紙・作成過程にも注目すると、**Texts A-E**の5件はいずれも漢文仏典の紙背を二次利用している点で共通する。

なお、これらの文書のうち、出土地番号 (TII T1330) をもつ **Text C** はトヨク (Toyoq) 遺跡出土、**Text F** (TI α) は高昌故城内の寺院址 α [Grünwedel 1905, fig. 56] 出土であることが判明し、また **Text A** (TM 70) はもっぱら高昌故城を中心として発掘調査を行なった第1次ドイツ隊の将来にかかる。これ以外の **Texts B, D, E** については具体的な出土地を知り得ないが、いずれもドイツ探検隊により将来されたものであり、広義のトゥルフアン地域から出土したことは確実である。文書の出土地は本来の作成地域と近接すると考えられるので、この点でも **Texts A-F** はほぼ共通するといえる。

以上の諸点から、**Texts A-F** の6件が同一の歴史的背景のもとで作成・発行されたことは明瞭である。そこで筆者は、この6件の供出命令文書を、頻出する供出負担者名にちなんで「ヤリン文書」と総称することを提案する。

## 2. 文書の年代

6件のヤリン文書はいずれも草書体で書かれ、また *noyîn* (< mo. noyan), *ṭarūya* (< mo. darūya), *arča* (< mo. arča) などのモンゴル語起源の借用語[語註 A1b; A4; E3]からも確実にモンゴル時代に比定できる<sup>(4)</sup>。

さらに、**Texts A, B** の *it yil yana bišinč ay* 「犬年再 (= 閏) 五月」という年月表記は、より具体的に至治2年壬戌 (1322) 閏5月に比定することができる[語註 A1a]。これを基準とすれば、**Text E** の「猿年」・**Texts F** の「羊年」についても、最も近接する年代として延祐7年庚申 (1320)・延祐6年己未 (1319) をそれぞれ提示できる（ただし、12年周期の誤差を考慮する必要は残る）。**Texts C, D** は年月日記載が破損脱落しているものの、上述したように **Texts A, B, E** と同一の公権力者集団によって発行されている以上、その年代が大きく離れる可能性は低い。すなわち、ヤリン文書は全体として西暦1320年前後に比定されるべきものと筆者は考える。

<sup>(4)</sup> ウイグル文書の時代判定の指標については森安 [1994, pp. 63-83] を参照。

### 3. 歴史学的考察 ——チャガタイ=ウルス支配期文書との比較検討——

さきに筆者は、漢文・ペルシア語編纂史料に基づく諸先学の成果を整理し、またトウルファン地域発現のチャガタイ=ウルス (Čaγatai-ulus) 発行モンゴル語文書の年代を勘案して、チャガタイ=ウルスによるウイグルistan実効支配の開始時期を西暦 1320 年代後半から 1330 年前後に設定した。その上で、チャガタイ=ウルスの権威を奉じる共通の公権力者集団により発行された 15 件のウイグル文供出命令文書群を「クトルグ印文書」と総称し、その発行年代を西暦 1357 年を中心として 14 世紀中葉に比定した [松井 1998b, pp. 7-11]。また、やはりチャガタイ=ウルス支配下で発行されたウイグル文供出命令文書 2 件にも検討を加え、その年代を西暦 1349 年に比定した [松井 2002, Texts A, B]。

一方、本稿での考察の結果、ヤリン文書 6 件は 1320 年前後に比定された。すなわち、ヤリン文書は、明らかにチャガタイ=ウルス支配期に属する既公刊の計 17 件の供出命令文書よりも、時間的に先行することとなる。そこで本節では、これら両文書群について比較検討し、歴史学的な考察を加える。

#### (1) 形態的特徴の比較検討

まず、文書に捺された印章の形態的特徴・捺印方法・個数に着目すると、両文書群には下記のような対照的な相違が看取できる。

#### ◎チャガタイ=ウルス支配期の供出命令文書

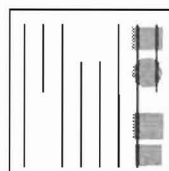
印の形状：方印ないし円印。

印寸：方印であれば約 2.5 ~ 3.0 cm 四方、また円印であれば直径 3.0 cm 前後。

印文：パクパ字・ウイグル字やブラーフミー字で解読できるもの、またはこれらの文字を変形・図案化したものが多い<sup>(5)</sup>。さらに、双葉状の「チャガタイ紋章」も頻繁に用いられる [松井 1998b, p. 8]。

個数：1, 2 個の場合もあるが、3 個以上捺される例が 17 件中 8 例 (松井 1998b, Texts 1, 7, 9, 10, 11, 13, 14, 松井 2002, Text B) あり、最大では 6 個にのぼる例がある (松井 1998b, Texts 9, 14)。

捺印位置：文書末尾の行頭から捺される (右模式図 A 参照)。また捺印者が複数の場合、しばしば彼ら相互の序列が意識される [松井 1998b, pp. 5-6]。



模式図 A

#### ◎ヤリン文書

印の形状：方印もあるが、長方形印ないし楕円形印もみられる。

印寸：方印では 1.7 ~ 2.0 cm 四方、長方形・楕円形印では短辺 1.2 ~ 1.5 cm に長辺 2.0 cm 前後。すなわち、チャガタイ=ウルス期の供出命令文書に捺される印章よりも小寸である。

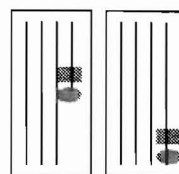
<sup>(5)</sup> 松井 1998b, pp. 3-4; 松井 2002, pp. 107-108. なお、クトルグ印 E のパクパ字銘文で筆者が čin と翻字した部分は、吉池孝一 [2000a, pp. 113-116; 2000b, p. 148] に従って jin と訂正すべきである。また、吉池はクトルグ印 D の印文をパクパ字 gei < chin. 吉 と解読する案を提示している [吉池 2000a, pp. 111-112]。

印文：漢字印文をもつ印章Cは例外的で、単なる図像的・幾何学的紋様が多い。

また「チャガタイ紋章」はみられない。

個数：すべて2個。3個以上捺される例はない。

捺印位置：文書末尾の birzün 「与えよ、供出せよ」という命令文言に重なる形で捺印される（右模式図B参照）。すなわち命令文言が文書末尾行頭に  
くれば行頭に、文書下端にくれば下端に捺される<sup>(6)</sup>。



模式図 B

さらに、チャガタイ=ウルス期の供出命令文書には、「聖なる語」を行頭に配し続く2～3行の行頭を下げて敬意を示す「チャガタイ式敬意表現」が散見した〔松井 1998b, pp. 6-7; 上掲模式図A, lines 3-5を参照〕。しかし、ヤリン文書の **Text B** (line 5) では、有力な将相と思われる tūmān-noyīn 「万戸長」〔語註 A1b〕に対して、「チャガタイ式敬意表現」ではなく、他の行頭よりも高い位置に配すること（抬頭）で敬意を表現している。すなわち、チャガタイ=ウルス支配期文書とヤリン文書の間には、敬意表現に代表される書写上の体例にも相違がみられるのである。

## （2）書式の比較検討

すでに筆者は、チャガタイ=ウルス支配期文書も含めたウイグル文供出命令文書について、(1)十二支獣紀年・月日、(2)物件供出の理由・目的、(3)供出物件とその数量、(4)供出負担者、末尾の(5)命令文言、の5項目を共通する定型的書式として抽出している〔松井 1998a, p. 032; 松井 1998b, pp. 11-13; 松井 2002, pp. 94-100〕。そこで、ヤリン文書6件についても、和訳を記載項目ごとに分解して提示し、上述の書式との整合性を検証する。丸数字は原テキストの行数を示す。

### Text A

①犬年再（=閏）五月二十日に。…………… (1)年月日  
万戸長に与えるべき6（着の）②騎乗用上着、万戸長の文書によって  
ビュリユンギュティに与えるべき3（着の）③騎乗用上着、  
合計これだけのうち、…………… (2)供出目的・(3)供出物件と数量（総量）  
ヤリン、オグリユンチ、ブルハン=オグリが…………… (4)供出負担者  
1（着の）④騎乗用上着を…………… (3)実際の供出物件と数量  
調達して、キタイ=ダルガに供出せよ。…………… (5)命令文言

### Text B

(1)年月日

①犬年再（=閏）五月二十日に。……………

<sup>(6)</sup> ただし **Text C** では、line 4 の命令文言 birzün 「供出せよ」に重なる形で印章が捺されるものの、line 6 の命令文言 birzün 「供出せよ」には捺印がない。Line 4 の alīm-ta 以降のテキストは、行間もやや狭くなっており、捺印された後に追加された可能性がある。このような捺印後の追記の例は「クトルグ印文書」にもみられる〔松井 1998b, pp. 23, 34-35〕。

②キタイ=ダルガ, ビュリユンギュテイ使臣たち③への, 駅通通行用の  
 8 (頭の) 駅伝④馬, 1 (人の) 馬夫(となる)人, また⑤万戸長に与えるべき  
 3 [石の] ⑥麵粉, キタイ=ダルガに与えるべき□⑦石の麵粉,  
 ビュリユンギュテイが受領 [して] ⑧行くべき3 (着の) 騎乗用上着,  
 合計これ [だけのうち] ..... (2)供出目的・(3)供出物件と数量(総量)  
 ⑨ヤリン, オグリユンチ, プルハン=オグリが, ..... (4)供出負担者  
 □ (頭の) ⑩駅伝馬・5斗の麵粉,  
 騎乗用上着の⑪代価(である)4幅広棉布を ..... (3)実際の供出物件と数量  
 ⑫あわせて調達して供出せよ. .... (5)命令文言

### Text C

①..... 10 .....  
 ②斤の棉糸のうち, ..... (3)供出物件と数量(総量)  
 ケルシン, ..., ③ヤリンが ..... (4)供出負担者  
 1斤の糸を, ..... (3)実際の供出物件と数量  
 調達して④巻き取らせて(?) 供出せよ. .... (5)命令文言  
 アリム税として⑤至った(=賦課された) ..... (2)供出目的  
 3斤の棉花のうち, ..... (3)供出物件と数量(総量)  
 ⑥1斤の棉花もまた供出せよ. .... (3)実際の供出物件と数量・(5)命令文言

### Text D

① [□年第□月□日] に, ..... (1)年月日  
 テミユル=ブカの, 染色用のリュクチュング  
 ②..... 染色用の2棉布のうち ..... (3)供出物件と数量(総量)  
 ケルシン, ヤリン ..... (4)供出負担者  
 ③..... [(3)供出物件と数量]  
 供出せよ. .... (5)命令文言

### Text E

①猿年第七月初(旬の)二日に, ..... (1)年月日  
 .....②旅行用食糧のための2斗の麵粉を, ..... (2)供出目的・(3)供出物件と数量(総量)  
 ケル [シン] ..... (4)供出負担者  
 ③10斤のトショウも供出せよ. .... (3)供出物件と数量・(5)命令文言  
 1 ..... (5)命令文言

## Text F

- ①羊年第九月二十八日に。…………… (1)年月日  
……………②マチャル使臣に与えるべき…………… (2)供出目的  
7 厚手綿布のうち…………… (3)供出物件と数量(総量)  
ケルシン、ヤリ [ン]…………… (4)供出負担者  
③〔調達して〕供出せよ。…………… (5)命令文言

テキストが大きく破損脱落している **Texts C-E** をも含め、ヤリン文書 6 件も、①冒頭に年月日記載が記され、末尾に命令文言が記される、②万戸長 (*tümän noyın*)・ダルガ (*taruqa*)・使臣 (*ilči*) などの公権力者やアリム税 (*alīm*) などの公的賦課が供出目的として言及される、③物件の供出先となる人名や供出物件の用途が詳細に記される、④実際の負担額以外に必要総額などまで記されるなど、その他の供出命令文書と共通する特徴をそなえていることが判明する [cf. 松井 2002, pp. 97-98]。すなわち、文書の書式の上では、チャガタイ=ウルス支配期の供出命令文書とヤリン文書との間に相違はないといえる。

### (3) 小結

本節 (1) 項での検討からは、ヤリン文書 6 件にはチャガタイ=ウルス支配の影響を示す特徴が全く看取されないといえる。この事実は、ヤリン文書が作成・発行された西暦 1320 年前後の段階ではチャガタイ=ウルスの権威・影響力がウイグルistanの公権力者集団に全面的には及んでいなかったことを示しており、チャガタイ=ウルスのウイグルistan実効支配が西暦 1320 年代後半から 1330 年前後に本格化したとする筆者の所論 [松井 1998b, pp. 9-10] を補強するものである。

一方、(2) 項での検討からは、チャガタイ=ウルス期文書群とヤリン文書とは共通の定型的書式を有していることが確認された。一般に、行政命令文書・公文書における定型的な書式は、文書を作成し機能させている文書行政システムの体系性を反映するものとみなせる。筆者は前稿 [松井 2002, pp. 94-106] で、供出命令文書の書式の共通性に依拠しつつ、ウイグル文供出命令文書をめぐる行政末端の物件供出=徴税システムの再構成を試みた。ただし前稿ではモンゴル時代 (13～14 世紀) という時間枠を設定したのみで、ウイグルistanをめぐる政治史の変動の影響を考慮に入れなかった。しかし、チャガタイ=ウルス支配の確立という政治史的画期を隔てる複数の文書群の間で書式の共通性が確認されることは、前稿で再構成したような供出命令文書による徴税システムがモンゴル時代を通じてほとんど変更なく踏襲されたことを示す。換言すれば、本稿の考察により、前稿の分析結果はモンゴル時代を通じて有効であることが確認されるのである。

### おわりに

本稿では、管見のウイグル文供出命令文書のうち、ごく限られた数の文書群を対象にしたものではあるが、筆者のこれまでの分析結果と、そのモンゴル時代を通じての有効性を再検証・再確認することができたと考える。文書の包括的な校訂テキスト公刊作業とともに、個々の文書・文書群の相違点

を歴史学的に考察することは、今後とも重要な課題であり、果たすべき責めとしたい。

## テキスト・訳註

### Text A U 5283v (TM 70) [BBAW]

[解説] 犬年（1322）閏5月20日付、騎乗用上着（olpaq）供出命令。

[研究] ETHV [178/29]; Zieme 1975, p. 333, n. 9.

[備考] 26.5 x 6.5 cm. Ocre ~ Ocre foncé. 完. 漉き縞のない均質な上質の紙。現在は台紙に貼付（サンドイッチ）保存。公印Bの下に長方形印1個（1.2 x 1.8 cm）。漢文仏典『大般涅槃經』（『大正新脩大藏經』 Vol. 12, No. 375, p. 721a, 7-11）紙背の二次利用。

- 1 it yil yana bišinč ay ygrmikä tūmān noyīn-qa birgü altı
- 2 olpaq tūmān noyīn-nīng bitigi birlä bürüngüday-kä birgü üç
- 3 olpaq birlä munča-ta yalın ögrünč burxan oyli bir olpaq
- 4 büdürüp qıday taruya-qa birzün

- 1 犬年再（＝閏）五月二十日に。万戸長に与えるべき6（着の）
- 2 騎乗用上着，万戸長の文書によってビュリュンギュテイに与えるべき3（着の）
- 3 騎乗用上着，合計これだけのうち，ヤリン，オグリュンチ，ブルハン＝オグリが1（着の）騎乗用上着を
- 4 調達して，キタイ＝ダルガに供出せよ。

### [語註]

**A1a, it yil yana bišinč ay:** Y'N'=yana「再び」は一見すると具格助詞 -in とみえるが，yalın (line 3) の語末の -YN と比較すると字間がやや大きく，また後半部の字間は olpaq (lines 2, 3), taruya (line 4) の語末の -'X ~ -X' とほぼ等しい。文脈から，本処の yana は uig. žün (< chin. 閏) [松井 1998b, pp. 14-15; 松井 2002, p. 107] と同じく閏月を示すものとみなし得る<sup>(7)</sup>。モンゴル時代のウイグルスタンの暦は，原則的には政府発行の暦＝授時暦に従っていたと考えられる [Bazin 1991, pp. 245-246, 306-307, 313-315, 322; cf. 松井 2002, p. 107]。そこで 13～14 世紀の中国暦および授時暦中に「犬年閏五月」を求めると，至治2年壬戌（1322）閏5月が対応する。

**A1b, tūmān noyīn:** < mo. tümen noyan 「万戸長，万人隊長」. Mo. noyan > uig. noyīn の借用については拙稿 [松井 1998b, pp. 32-33] を参照。Text B (line 5) にも現れ，この両者は明らかに同一人物である。

Mo. tümen ~ tü. tūmān (> pers. tūmān) は本来「万，10000」を示す数詞であり，転じて1万人の兵士を供出する遊牧民の軍事編成単位を意味し，さらに定住地域にも行政単位・税役徴発単位として導入された。最近，川本正知は，14 世紀以降の西トルキスタンだけでなくイラン・雲南・チベット・ロ

<sup>(7)</sup> ちなみに吐蕃期の敦煌漢文文献にも，「後八月」「後五月」「後三月」など，「閏」ではなく「後」を用いて閏月を示した例がある [池田 1990, Nos. 1024, 1025, 1032, 1046]。



シアの諸地域の状況をも通観して、定住民徴発単位としての *mo. tümen* ~ *pers. tūmān* 「万戸」が第4代皇帝モンケ (Möngke, r. 1251-1259) 治世に帝国各地に設定されたとしたが [川本 2000, pp. 38-56], 東トルキスタン~ウイグルスタン地域に関しては史料に基づく検証を充分に加えなかった。しかし、モンケ治世のウイグルスタンでも、その他のモンゴル支配下地域と同様、戸口調査と十進法的住民組織 (千戸・百戸) の編成が施行されているから [松井 2002, pp. 87-92], 千戸の上位の単位として万戸が設定された可能性がある。また、本処および **Text B** の *tümān noyīn* 「万戸長」の他にも、世襲職としての *tümān bägi* ~ *tümānbägi* 「万戸長」という称号がすでにウイグル語文献中に確認されている [BTX XIII, Text 49; Zieme 1992, pp. 54-56; cf. 松井 2002, p. 112]. 同様に、BBAW 所蔵のウイグル語文書断片 Ch/U 7353v (TII 1480) にも、某 ([ (...)čīn)・プンニヤシリ (Punyaširi < *skt. puṇyaśrī*)・ウトパラム (Uḍpal-am < *skt. utpal*?) という3名の万戸長 (*tümān bägi*) がみえ、支出リスト様文書 U 4845 (= 松井 2002, Text D, line 4) には *tümān aqa* 「万戸長殿」という表現もみえる。周知の通り *tü. bäg* (> *bäg-i* ~ *bägi*) と *mo. noyan* とはしばしば互用されるから [e.g. TMEN II, p. 399], 以上のモンゴル時代のウイグル語文献中にみえる *tümān noyīn* と *tümān bägi* は明らかに同一の称号・官職をさす。さらに14世紀末~15世紀初頭のウイグルスタンには、カラホージャ (Qara-Qočo > *chin.* 哈刺火州)・トゥルファン (Turfan > *chin.* 吐魯番)・リュクチュング (*Lükčüng* ~ *Lükčīn* > *chin.* 柳城~柳陳) の土着ウイグル人3勢力が割拠しており、そのうちトゥルファン・リュクチュングの支配者はそれぞれ「万戸」と称していた<sup>(8)</sup>。『明史』巻329・西域伝・土魯番 (Turfan) の条によればトゥルファン万戸はモンゴル支配下で設置されたというから、リュクチュング万戸の設置も同時期と推測される。以上から、筆者は、川本 [2000] の指摘を敷衍して、モンゴル支配下のウイグルスタンにも定住民徴発単位としての万戸が編成されていた蓋然性が高いと考える。ウイグル語文献にみえる *tümān noyīn* ~ *tümān bägi* は、この万戸 (*tümān*) を管轄する長官であろう。

ところで、本処の文言からは、後続するビュリユングテイ (*Bürüngüday*) という人物への物件供出が「万戸長の文書によって (*tümān noyīn-ning bitigi birlä*)」命令されていたことがうかがえる。ウイグル文供出命令文書の書式の大きな特徴として、文書の作成・発行者や命令権者が書式上では明記されないことがあげられる<sup>(9)</sup>。本処の記述は、供出命令文書の作成・発行過程、さらには文書行政システムの構造を解明する上で重要であり、別稿であらためて詳論する予定である。

**A2a, olpaq:** > *mo. olbuy* ~ *pers. ulpāq*. **Text B** (lines 8, 10) および BBAW 所蔵の収支リスト様文書 Ch/U 7345 (line 9) [cf. Raschmann 1995, Nr. 66] にも在証される。Doerfer はモンゴル語・チュルク語・ペルシア語の諸例を「冬季の騎馬用の丈の短い綿入りの上着 (*kurze wattierte Jacke für Winterreisen zu Pferde*)」と総括する [TMEN II, pp. 111-112, Nr. 527]. しかし本文書は閏5月付であるから、冬季用と限定す

<sup>(8)</sup> 『明太宗実録』永樂5年(1407)4月丁酉「哈刺火州王哈散(Hasan)・吐魯番萬戸賽因帖木兒(Sayīn-Tāmūr)・柳陳城萬戸瓦赤剌(Vajra)等、俱遣人貢玉璞等物、悉賜鈔・帛・襲衣」; 永樂11年(1413)11月辛丑「別失八里(Biṣ-Baliq)王馬合麻(Muhammad)・吐魯番萬戸賽因帖木兒・柳陳萬戸觀音奴(Qaniṁdu)等、俱遣使從給事中傅安等貢名馬・海青、賜賚其使有差」; 『明宣宗実録』宣德5年(1430)12月丁亥「柳城萬戸阿黑把失(\*Aq-Baš)等十六人來朝」。これら15世紀初頭トゥルファン地域のウイグル人土着勢力については、間野 [1964, pp. 8-12] および堀 [1975, pp. 13-22] を参照。

<sup>(9)</sup> 現時点で知られているウイグル文供出命令文書で発行責任者が明記されるのは 3Kr29b (= USp 123) のみである [cf. 松井 2002, p. 104].

る必要はない。本処では mo. olbuγ の “habilement qu'on porte seulement à cheval lorsq'on va en voyage; camisole” [Kowalewski I, p. 407] という解釈に従い「騎乗用上着」と訳す。

**A2b, būrüngüḍāy:** buyrgudī~ būrtgüdi という解読案を提示しつつ官職名・称号と考えた Zieme [1975, p. 333] には従えない<sup>(10)</sup>。Text B (line 2) では ilči「使臣」の称号を伴うから人名とみなすべきである。ペルシア語史料で Burunkitāy ~ Būrūntāy ~ Būrū(n)ktāy, 漢文史料で不憐吉歹~ト憐吉歹~ト鄰吉帯~ト鄰吉台と表記されるものと同じ人名であろう。

**A4, qīḍay ṭarūya:** qīḍay > qīṭay > pers. ḥitāy ~ chin. 契丹~乞台。qīṭay は地域名称としての「キタイ、漢地（北中国）」さらには「キタイ人（の）、漢人（の）」を表わす場合もあるが [SUK 2, p. 276], 本処では漢文史料で乞台・乞帯・乞歹と転写される人名とみる。ṭarūya / ṭarūyači < mo. darūya / darūyači は、周知の通り、モンゴル権力が占領地域に派遣する「総督、代官、目付、監視官」である。

**Text B Ch/U 7370v (TII 1035) [BBAW]**

[解説] 某犬年（1322）閏5月20日付、駅伝馬・麵粉・棉布供出命令。Raschmann [1995, p. 145] が「旅行許可証 (Reisebegleitschreiben)」とするのは訂正すべき。

[転写] Raschmann 1995, p. 145, Nr. 67 (lines 11-12) .

[研究] Zieme 1975, p. 333, n. 9; Raschmann 1995, pp. 47, 86-87; 松井 1997, p. 113.

[備考] 15.5 x 16.0 cm. Ocre foncé ~ Ocre. 上端完, 左・下一部缺。漉き縞のない上質の紙。現在はガラス保存。方印 (2.0 x 1.7 cm) 1 個, 長方形印 (1.2 x 1.8 cm) 1 個。漢文印刷仏典『大般若波羅蜜多經』(『大正新脩大藏經』 Vol. 5, No. 220, p. 782c, 9-16) 紙背の二次利用。

- 1      یت یل یانا بیشینچ ای یگرمیکه
- 2      qīḍay ṭarūya būrüngüḍāy ilči-lār-
- 3      -kā yam-qa baryu sākiz at
- 4      ulay bir ulay-čī kiši yana
- 5      tümän noyın-qa birgü üč šīy
- 6      min qīḍay ṭarūya-qa birgü (.) [   ]
- 7      šīy min būrüngüḍāy aḥip
- 8      baryu üč olpaq bilä munča-ta
- 9      yalın ögrünč burxan oyli [   ]
- 10      at ulay biš küri min olpaq
- 11      yantuḍ tört yätiz böz
- 12      bilä бүдүрүп birzün

<sup>(10)</sup> Zieme [1975] が本処の būrüngüḍāy と関連づけたウイグル文書断片 U 6026 の buyrgudī~ būrtgüdi は、後に purokiḍi (< skt. purohita)「帝師；近臣」と改められている [Kudara & Zieme 1995, pp. 67-69].

- 1 犬年再 (= 閏) 五月二十日に。
- 2 キタイ=ダルガ, ビュリユンギュティ使臣たち
- 3 への, 駅通通行用の 8 (頭の) 駅伝
- 4 馬, 1 (人の) 馬夫 (となる) 人, また
- 5 万戸長に与えるべき 3 [石の]
- 6 麵粉, キタイ=ダルガに与えるべき□
- 7 石の麵粉, ビュリユンギュティが受領 [して]
- 8 行くべき 3 (着の) 騎乗用上着, 合計これ [だけのうち]
- 9 ヤリン, オグリユンチ, ブルハン=オグリが, □ (頭の)
- 10 駅伝馬・5 斗の麵粉, 騎乗用上着の
- 11 代価 (である) 4 幅広棉布を
- 12 あわせて調達して供出せよ。

[語註]

**B1, *it yil yana bišinč ay ygrmikä*:** 語註 A1a を参照。

**B3, *yam*:** ~ mo. *jam* 「駅」。明代の『高昌館訳語』には *uig. yam qa* > 眼哈 (< pers. *yām hāna*) / chin. 駅という対訳例があったが、ウイグル語世俗文書の在証例はこれまで確認されていなかった [Ligeti 1966, p. 279; ED, p. 933]。筆者が知り得た限りでは BBAW 所蔵の Ch/U 6107v (line 5) にも在証される。

**B3-4, *säkiz at ulay*:** Raschmann [1995, pp. 86-87] は本処を *säkiz on ulay* 「80 頭の駅伝馬」としたが、字形は明らかに 'WN = on ではなく 'T である [松井 1997, p. 113]。

**B5, *tümän noyin*:** 語註 A1b 参照。なお、本処では明らかに抬頭による敬意表現が加えられている。

**B6:** 文脈からみて、行末の缺落部には数詞があったものと推測される。

**B7-8, *alip baryu*:** *alip* はその他の在証例 (e.g. U 5288 = 松井 1998b, Text 4, line 3) から補う。

**B8, *munča-ta*:** 行末の缺落部は Text A (line 3) との比較から補う。

**B9:** 文脈からみて、行末の缺落部には次行頭の *at ulay* 「駅伝馬」の頭数が記されていたと推測される。

**B10-11, *olpaq yantuđ tört yätiz böz*:** *yätiz* (~ *yitiz*) *böz* 「幅広棉布」は、通貨的に使用される棉布の規格を示す表現と考えられる [cf. Raschmann 1995, p. 47]。Line 9 以降に記載される実際の供出物件のうち、本処の *olpaq* 「騎乗用上着」については具体的な数量が記載されていないので、おそらく *tört yiti böz* 「4 幅広棉布」により *olpaq* 「騎乗用上着」が代納されるものと思われる<sup>(11)</sup>。*olpaq* に後続する *yantuđ~yantut* (~ *yanut*) は “something given in return for or in place of” の意 [ED, p. 946] であるが、ここでは「代価」と試訳しておく。なお、*yantut~yanut* については別稿を準備中である。

<sup>(11)</sup> 本文書全体の内容を「使節 (*ičči*) たち・所要の 80 頭の駅伝馬・馬夫に支払われる料金が記される。まさに支払われるべき *yiti* (sic!) *yitiz böz* 『7 [4 の誤り] 幅広棉布』という額がそれに関係するかは明瞭でない。単に、この額は返済 (*yantut*) に関して支払われると言及されている」とする Raschmann [1995, pp. 86-87] の解釈も改められるべきである。

**Text C Ch/U 6954v (TH T1330) [BBAW]**

[解説] 年月日不明, 棉糸・棉花供出命令.

[研究] Yamada XII, p. 498.

[備考] トヨク出土. 13.6 x 8.6 cm. Chamois α ~ Chamois clair. 左端缺. 漉き縞のない中上質の紙. 現在はガラス保存. 印章 A・印章 B あり. 漢文仏典 (内容未同定) 紙背の二次利用.

[missing]

- 1 [                      ] on [              ]
- 2 *bađman böz yïp-ïnta kärsin* [              ]
- 3 *yalın bir bađman yïp bütürüp*
- 4 *türşdip birzün alim-qa*
- 5 *tgmiş üç bađman kâpâz-tâ*
- 6 *bir bađman kâpâz m-â birzün*

[前 缺]

- 1 ..... 10 .....
- 2 斤の棉糸のうち, ケルシン, .....
- 3 ヤリンが 1 斤の糸を, 調達して
- 4 巻き取らせて (?) 供出せよ. アリム税として
- 5 至った (= 賦課された) 3 斤の棉花のうち,
- 6 1 斤の棉花もまた供出せよ.

[語註]

**C2a: bađman:** chin. 斤に相当する重量単位 [松井 2002, pp. 111-112].

**C2b, böz yïp:** 周知のように böz は「棉布」, yïp は「糸, 紐」を意味するが, 本処では böz yïp と熟して「棉糸」を意味している.

**C2c:** 行末の缺落部には供出負担者名が書かれていたものと推測される.

**C4a, türşdip:** 字形は TYWRSDYP ~ TYWRXDYP であり, 文脈からは動詞の連用形と推定されるが, 適当な動詞語幹を見出せない. ここでは TWYRS DYP = türşdip の誤記とみなし, v. \*türşd- は v. tür- “to roll up” の協同形 v. türüş- [ED, pp. 530, 554; CTD 2, p. 12] にさらに使役助動詞 -d- が接続したものとみて「(棉糸を) 巻き取らせる」と試訳するが, 疑問が残る. 专家の示教を乞う.

**C4-5, alim-qa tgmiş:** alim の原義は「負債」であり, 契約文書では birim alim と熟して「税, 租税」を意味する例が頻出する [ED, pp. 145-146; UW 1, pp. 92-93; SUK 2, p. 239]. 本処では alim 単独で「アリム税」と訳しておく. 本処で「アリム税に至った」というのは, 後続する「3 斤の棉花」が「アリム税として賦課された」ことを示すものと解釈する. また, 本稿脚注 (6) も参照.

**Text D Ch/U 6910v (TII 1408) [BBAW]**

[解説] 年月日不明，棉布供出命令。

[転写] Raschmann 1995, p. 140, Nr. 59.

[研究] Raschmann 1995, p. 39.

[備考] 13.5 x 7.0 cm. Beige ~ Chamois α. 上端缺，下端・右端完，左端完？ 漉き縞のない中上質の紙。  
現在はガラス保存。印章 A・印章 C あり。漢文仏典『佛說未曾有因縁經』（『大正新脩大藏經』 Vol. 17, No. 754, p. 583a, 16-18）紙背の二次利用。

- 1 [ ] -qa tmür buqa-nıng boduıyü lükčüing  
2 [ ] boduıyü iki böz-tä kärsin yalıñ  
3 [ ] birzün

- 1 [□年第□月□日] に，テムュル=ブカの，染色用のリュクチュング  
2 ……………染色用の 2 棉布のうち，ケルシン，ヤリン  
3 ……………供出せよ。

[語註]

**D1a:** オモテの漢文仏典の残存状態から，本文書の本来の縦寸はおそらく現存の 2 倍程度と推測されるから，冒頭の缺落部に年月日が記載されていたと考えてよい。

**D1b, boduıyü:** bodu- は「染色する」の意 [DTS, p. 107; ED, p. 300; Raschmann 1995, p. 39] .

**D1c, lükčüing:** < chin. 柳中. 唐代以来のトゥルフアン盆地の主要都市の 1 つ。語註 A1b も参照。

**Text E Ch/U 7213v [BBAW]**

[解説] 猿年（1320?）7 月 2 日付，麵粉・トショウ供出命令。

[研究] BTT XIV, p. 58.

[備考] 13.4 x 5.0 cm. Chamois α ~ Beige. 下端缺。漉き縞のない均質な中上質の紙。現在はガラス保存。  
印章 A・印章 C あり。漢文仏典『妙法蓮華經』（『大正新脩大藏經』 Vol. 9, No. 262, p. 57c, 1-3）紙背の二次利用。

- 1 bičin yıl yitinč ay iki yangıqa YY[ ]  
2 yol azuq-luq iki küri min kärsin [ ]  
3 on bađman arča m-ä birzün bir (.)[ ]

- 1 猿年第七月初（旬の）二日に。……………  
2 旅行用食糧のための 2 斗の麵粉を，ケル [シン] ……  
3 10 斤のトショウも供出せよ。1 ……………

[語註]

**E2a, yol azuq-luq:** azuq だけでも「(旅行用の) 食糧, 携帯食料」を意味するが [ATG, p. 323; TMEN II, pp. 56-57, Nr. 475; DTS, p. 73; ED, p. 283; UW 5, p. 327], 本処では yol「道; 旅行」[ED, p. 917] と熟して明確に「旅行用の食糧」を示している. 接尾辞 -luq / -lük は「~用の, ~のための; ~に予定された, 配分された」を意味する [OTWF, pp. 121-131; 森安 1992, p. 47].

**E2b, kärsin:** 文書の破損のため前半の K'R しか残されていないものの, **Texts C, D** との関係から, この供出負担者名を復元する.

**E3, arča:** 「トショウ, 柏真」. 本処では薬用品としての供出を命じたものと推測される. 本来の古テュルク語で「トショウ」を意味するのは *artuč* であり, この形式は 11 世紀のカーシュガリー (Maḥmūd al-Kāšgarī) の『テュルク語辞典 (*Dīwān luġāt al-turk*)』にまで遡って在証され, ウイグル語文献にも散見し, 明代の『高昌館訳語』にも *uig. arčuč* / *chin. 栢* という対訳例がみえる [CTD I, p. 127; ED, p. 204; Ligeti 1966, p. 131]. 一方, 現代テュルク諸語には *arča* の形式が頻見するが [Wb I, p. 323; TMEN II, pp. 28-29, Nr. 448; Schwarz, p. 22], ウイグル語文献では本処が初例となる. ただしテュルク諸語の *arča* は *mo. arča* 「トショウ, 柏真」の借用と考えられており [ED, p. 204; TMEN II, pp. 28-29, Nr. 448; cf. Kowalewski I, p. 161; Lessing, p. 50], すでに『元朝秘史』巻 3・葉 22 裏 (§116) にも *mo. arča* > 阿<sup>𐰽</sup>児察 / *chin. 栢木* という対訳例が在証される. なお『至元訳語』草木門にも *chin. 栢樹* / *mo. 阿刺孫* という対訳例がみえ, Kara [1990, p. 283] はこの阿刺孫を阿刺察 (< *mo. arča*) の誤記とみなしている.

#### Text F      **MIK III 6972 (b+c) (TI α) [MIK]**

[解説] 某羊年 (1319?) 9 月 28 日付, 棉布供出命令.

[備考] 高昌故城内の寺院址 α 出土. b 断片は 7.5 x 2.7 cm, c 断片は 6.0 x 1.8 cm. Chamois clair. 上端・左端完. 樹皮利用. 現在はガラス保存. b 断片の下に c 断片がほとんど隙間なく接合する. 現存部には公印なし.

- |   |   |   |
|---|---|---|
| 1 | qoyn yil toquzunč ay säkiz otuz-qa [                | ] |
| 2 | mačar ilč-kä birgü yiti qalın böz-tä kärsin ya/in [ | ] |
| 3 | bütürüp birzün [                                    | ] |

- |   |   |
|---|---|
| 1 | 羊年第九月二十八日に. ....                          |
| 2 | マチャル使臣に与えるべき 7 厚手棉布のうち, ケルシン, ヤリ [ン] .... |
| 3 | [調達して] 供出せよ.                              |

[語註]

**F2a, mačar:** ~ pers. maġar “A Magyar, a Hungarian” [Steingass, p. 1174]. この人名は BBAW 所蔵の Ch/U 7411v (line 5) にも在証される.

**F2b, qalın böz:** Raschmann [1995, p. 53] に従って「厚手棉布」と考える.

**F2c, yalın:** 文書の破損のため前半の Y'L しか残されていないが、推補する。

## 語彙索引

alım	負債；アリム税（税目名称）C04	maçar	（人名）F02
al-	取る，受領する alıp B07	mä	また m-ä C06, E03
alti	6, 六 A01	min	麵粉 B06, B07, B10, E02
arça	トショウ，柏真 E03	munça	このような A03, B08
at	馬 B03, B10	noyın	長官；ノヤン，遊牧貴族 A01, A02, B05
ay	月 A01, B01, E01, F01	oγlı	（人名）A03, B09
azuq	食糧 E02	olpaq	騎乗用上着 A02, A03, A03, B08, B10
bar-	行く baryu B03, B08	on	10, 十 C01, E03
batman	斤（重量単位）bađman C02, C03, C05, C06, E03	otuz	30, 三十 F01
biçin	猿，申 E01	ögrünç	（人名）A03, B09
bilä	= birlä	qalın	厚い，厚手の F02
bir	1, 一 A03, B04, C03, C06, E03	qıtay	（人名）；キタイ，北中国 qıday A04, B02, B06
bir-	与える，供出する birgü A01, A02, B05, B06, F02; birzün A04, B12, C04, C06, D03, E03, F03	qoyn	羊，未 F01
birlä	～と共に，～によって；あわせて A02, A03; bilä B08, B12	säkiz	8, 八 B03, F01
biş	5, 五 B10	şır	石（容量単位）B05, B07
bişinç	第五の A01, B01	täg-	至る tgmış C05
bitigi	文書，証文 bitigi A02	tämür	（人名）tmür D01
bodü-	染色する boduyu D01, D02	toquzunç	第九の F01
böz	棉布 B11, C02, D02, F02	tört	4, 四 B11
buqa	（人名）D01	tümän	10000, 万；万戸 A01, A02, B05
burxan	（人名）A03, B09	türşd-ulaş	巻き取らせる (?) türşdip C04
bürüngütäy	（人名）bürüngüđäy A02, B02, B07	ulaş	駅伝馬，駄獣 B04, B04, B10
bütür-	調達する，満たす bütürüp C03, F03; büdürüp A04, B12	ulaşçı	馬夫 B04
daruya	ダルガ，総督，代官 taruya A04, B02, B06	üç	3, 三 A02, B05, B08, C05
it	犬，戌 A01, B01	yalın	（人名）A03, B09, C03, D02, F02
iki	2, 二 D02, E01, E02	yam	駅 3
ilçi	使臣，使節 B02, F02	yana	また，再び；閏 A01, B01, B04
käpáz	棉花 C05, C06	yangi	（月の初旬を示す語）yangıqa E01
kärsin	（人名）C02, D02, E02, F02	yantut	返済，返報；代価 yantud B11
kişi	人 B04	yätiz	幅広の B11
küri	斗（容量単位）B10, E02	ygrmi	20, 二十 ygrmikä A01, B01
lükčüng	（地名）D01	yıl	年 A01, B01, E01, F01
		yip	糸 C02, C03
		yiti	7, 七 F02
		yitinç	第七の E01
		yol	道；旅行 E02

## 略号表・参考文献目録

AOH: *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*.

Arat, R. R. 1937: Uygurca yazılar arasında. *Türk Tarih, Arkeologiya ve Etnografya Dergisi* 3 (1936), pp. 101-112, +1 pl.

ATG: A. von Gabain, *Altürkische Grammatik* (3. Auflage). Wiesbaden, 1974.

Bazin, L. 1991: *Les systèmes chronologiques dans le monde turc ancien*. Budapest / Paris.

BBAW: Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften, Akademienvorhaben Turfanforschung.

BTT XIII: P. Zieme, *Buddhistische Stabreimdichtungen der Uiguren*. Berlin, 1985.

- BTT XIV: T. Thilo (ed.), *Katalog chinesischer buddhistischer Textfragmente*, II. Berlin, 1985.
- CTD: Mahmūd al-Kāšyarī, *Compendium of the Turkic Dialects (Dīwān Luyāt at-Turk)*, I-III. Tr. & ed. R. Dankoff & J. Kelly. Harvard Univ.
- DTS: B. M. Наделяев et al. (eds.), *Древнетюркский Словарь*. Ленинград, 1969.
- ED: G. Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth Century Turkic*. Oxford, 1972.
- ETHV: R. R. Arat, Eski Türk hukuk vesikaları. *Journal de la Société Finno-Ougrienne* 65-1, 1964, pp. 11-77, -6 pls.
- Grünwedel, A. 1905: *Bericht über archäologische Arbeiten in Idikutschari und Umgebung im Winter 1902-1903*. München.
- 堀直 1975: 「明代のトゥルファーンについて」『待兼山論叢 (史学篇)』8, pp. 13-37.
- 池田温 1990: 『中国古代写本識語集録』東京大学東洋文化研究所.
- Kara, G. 1990: *Zhiyuan Yiyu*. Index alphabétique des mots mongol. AOH 44-3, pp. 279-344.
- 川本正知 2000: 「中央アジアのテュメンなる地域区分について」『西南アジア研究』53, pp. 24-60.
- Kowalewski, J. É.: *Dictionnaire mongol-russe-français*, I-III. Kasan, 1844-49.
- Kudara, K. & P. Zieme 1995: *Uigurische Āgama Fragmente* (3). 『仏教文化研究所紀要』34, pp. 23-83.
- Lessing, F. D.: (et al. eds.) *Mongolian-English Dictionary*. Berkeley / Los Angeles, 1960.
- Ligeti, L. 1966: Un vocabulaire sino-ouïgour des Ming. Le *Kao-tch'ang kouan yi-chou* du Bureau des Traducteurs. AOH 19, pp. 117-199, 257-316.
- 間野英二 1964: 「15世紀初頭のモゲーリスターン」『東洋史研究』23-1, pp. 1-27.
- 松井太 1997: (評) Raschmann 1995. 『内陸アジア言語の研究』12, pp. 99-116.
- 1998a: 「モンゴル時代ウイグルスタン税役制度とその淵源」『東洋学報』79-4, pp. 026-055.
- 1998b: 「ウイグル文クトルグ印文書」『内陸アジア言語の研究』13, pp. 1-62, +15 pls.
- 2002: 「モンゴル時代ウイグルスタンの税役制度と徴税システム」『碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎的研究』科学研究費補助金研究成果報告書 (課題番号 12410096) pp. 87-127.
- MIK: Museum für Indische Kunst (Berlin, Dahlem).
- 森安孝夫 1992: 「ウイグル文書簡記 (その三)」『内陸アジア言語の研究』7 (1991), pp. 43-54.
- 1994: 「ウイグル文書簡記 (その四)」『内陸アジア言語の研究』9, pp. 63-94.
- OTWF: M. Erdal, *Old Turkic Word Formation*, I-II. Wiesbaden, 1991.
- Raschmann, S.-Ch. 1995: *Baumwolle im türkischen Zentralasien*. Wiesbaden.
- Schwarz, H.: *An Uyghur-English Dictionary*. Bellingham (WA), 1992.
- Steingass, F.: *A Comprehensive Persian-English Dictionary*. London, 1892.
- SUK: 山田信夫 (著), 小田壽典・P. Zieme・梅村坦・森安孝夫 (編) 『ウイグル文契約文書集成 (*Sammlung uigurischer Kontrakte*)』1-3. 大阪大学出版会, 1993.
- TMEN: G. Doerfer, *Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen*, I-IV. Wiesbaden, 1963-1975.
- 梅村坦 1977: 「13世紀ウイグルスタンの公権力」『東洋学報』59-1/2, pp. 01-031.
- UW: K. Röhrborn, *Uigurisches Wörterbuch*, 1-6+. Wiesbaden, 1977-1998+.
- Wb: W. W. Radloff, *Versuch eines Wörterbuches der Türk-Dialecte*, I-IV. St. Petersburg, 1893-1911.
- Yamada, N. XII: Four Notes on Several Names for Weights and Measures in Uighur Documents. In: L. Ligeti (ed.), *Studia Turcica*, Budapest, 1971, pp. 491-498. (Rpt. in SUK 1 [XII])
- 吉池孝一 2000a: 「ウイグル文書のパスパ文字漢語印」『日本モンゴル学会紀要』30, pp. 109-118.
- 2000b: 「ウイグル文書のパスパ文字チュルク語印について」『東洋哲学研究所紀要』16, pp. 149-133.
- Zieme, P. 1975: Ein uigurischer Text über die Wirtschaft manichäischer Klöster im uigurischen Reich. In: L. Ligeti (ed.), *Researches in Altaic Languages*, Budapest, pp. 331-338.
- 1992: *Religion und Gesellschaft im Uigurischen Königreich von Qočo*. Opladen.

付記 本稿は平成15年度科学研究費 (若手研究 (B)・基盤研究 (B) (I)) による研究成果の一部である。





recto



verso

## Text A U 5283

Depositum der Berlin-Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften  
in der Staatsbibliothek zu Berlin-Preussischer Kulturbesitz, Orientabteilung.

recto

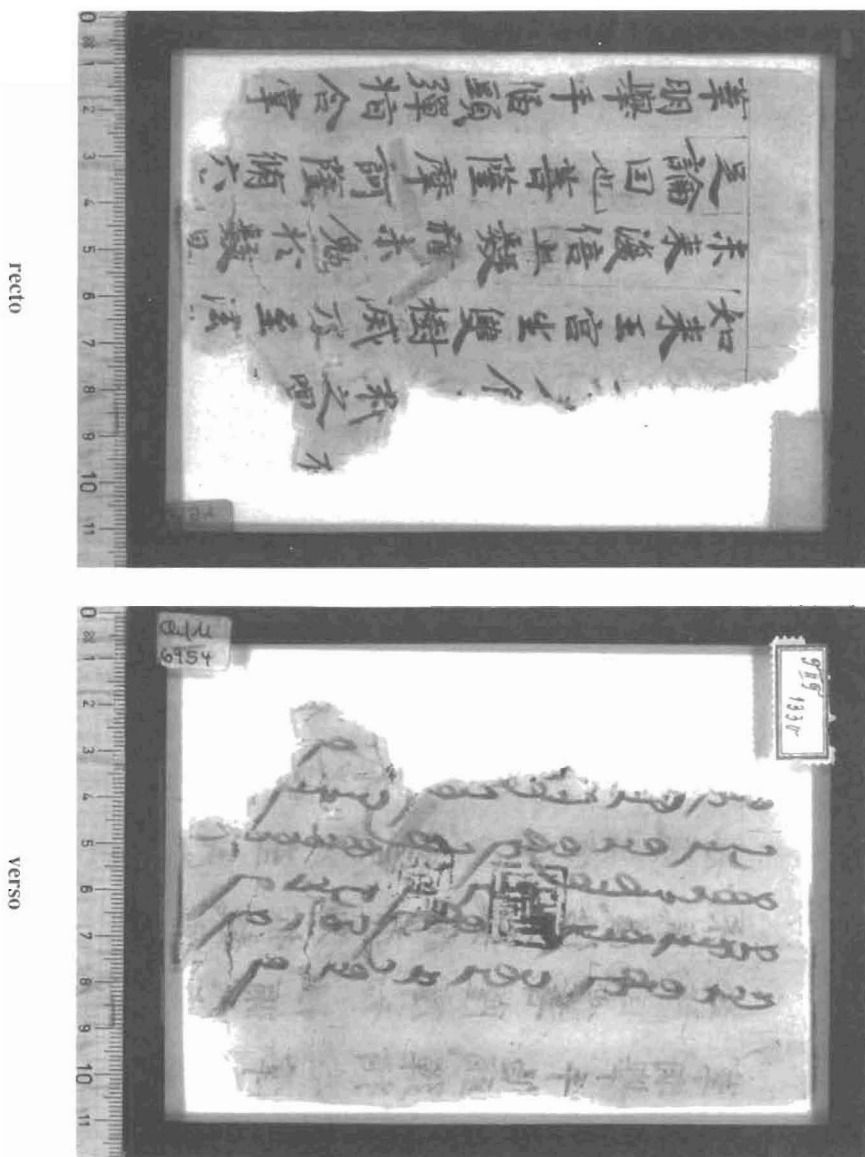


verso



## Text B Ch/U 7370

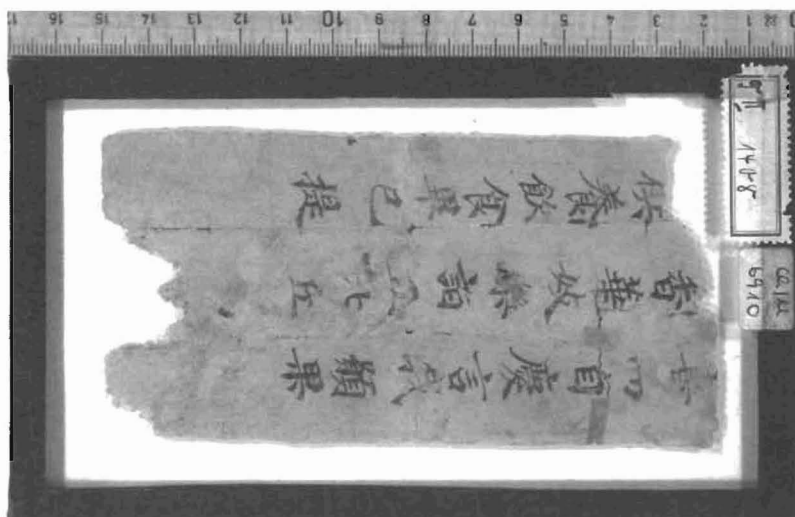
Depositum der Berlin-Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften  
in der Staatsbibliothek zu Berlin-Preussischer Kulturbesitz, Orientabteilung.



## Text C Ch/U 6954

Depositum der Berlin-Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften  
in der Staatsbibliothek zu Berlin-Preussischer Kulturbesitz, Orientabteilung.

recto



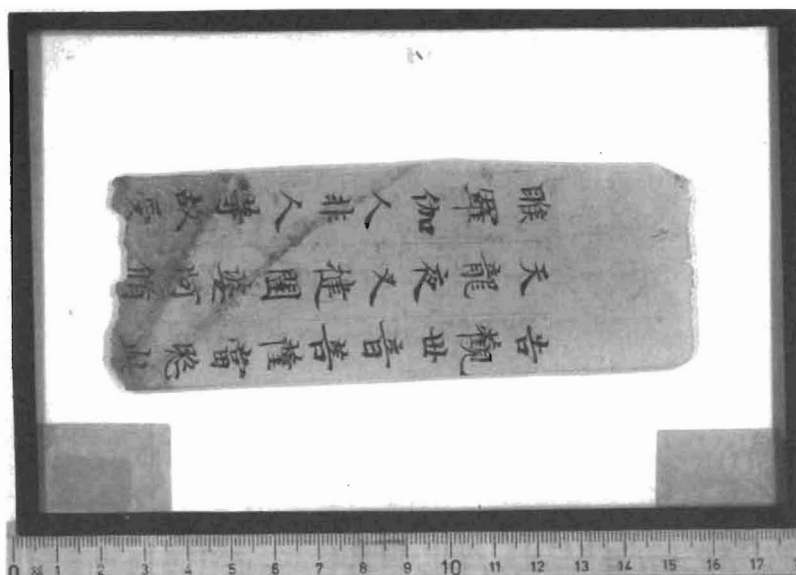
verso



## Text D Ch/U 6910

Depositum der Berlin-Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften  
in der Staatsbibliothek zu Berlin-Preussischer Kulturbesitz, Orientabteilung.

recto

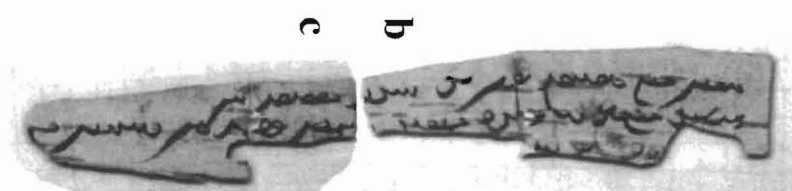
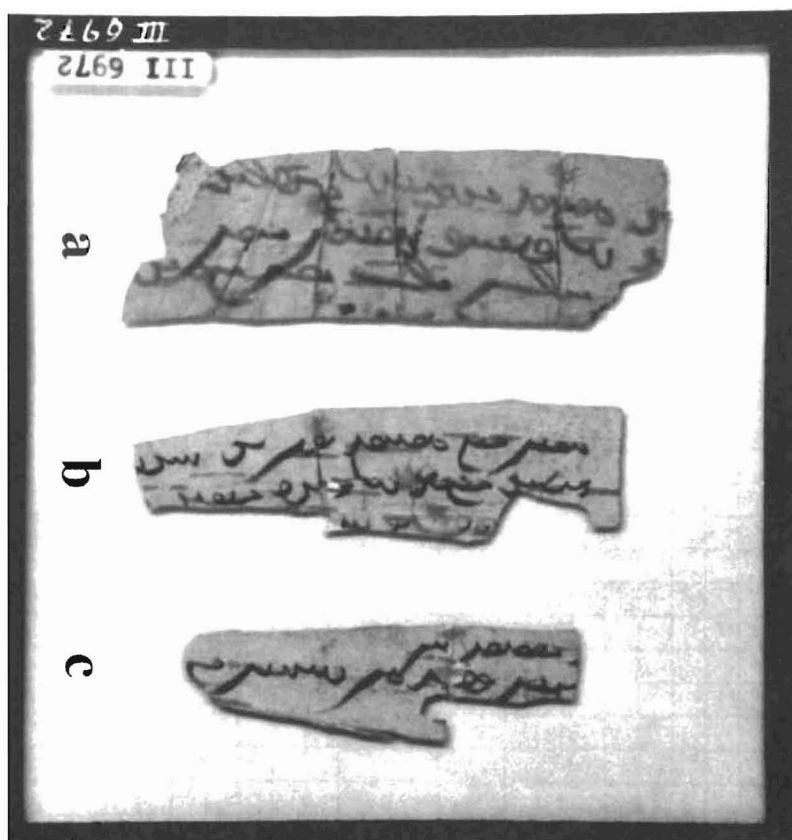


verso



## Text E Ch/U 7213

Depositum der Berlin-Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften  
in der Staatsbibliothek zu Berlin-Preussischer Kulturbesitz, Orientabteilung.



(Composite Image)

### Text F MIK III 6972 (b+c)

Reproduced by permission of Museum für Indische Kunst (Berlin, Dahlem)